

長野県における秋葉街道の復興と活用

周 宇放・劉 斐・芳賀幹大
張 雲奇・呉羽正昭

本研究は、長野県南信地方における歴史的街道である秋葉街道の復興経緯に着目し、関連する各地域による秋葉街道をめぐる取り組みを比較し、地域により扱い方が異なる要因を解明するものである。秋葉街道は江戸時代の秋葉信仰の広がりにより、静岡県浜松市に位置する秋葉神社への参詣道として利用されていた道であった。昭和時代にインフラ整備が進むと、秋葉街道の一部は国道に変わり、残った部分はほとんど利用されなくなった。しかし、秋葉街道沿道の伊那市長谷、大鹿村、飯田市の遠山郷では、2006年頃から地元住民によって道整備が行われてきた。3つの地域ともに、秋葉街道を地域活性化のための地域資源として再利用する認識を有する。しかし、観光資源としての位置づけが異なるために、3地域それぞれで異なったかたちで秋葉街道が利活用されている。

キーワード：秋葉街道、観光資源化、ボランティア、長谷、大鹿、遠山郷

I はじめに

I-1 研究背景と目的

日本の農山村では、大都市への人口流出等によって、少子高齢化と人口減少の現象が著しくみられる。こうした地域の活性化のための一つの手法として、地域資源を再発見し観光対象として活用する例が数多くみられる。その結果、交流人口の増加により、移住者が増え、経済効果が期待されるという構図である。地域資源としての農村性（ルーラリティ）の重要性は、呉羽（2013）などによって指摘されている。一方で、地元住民が地域資源を認識し、活性化活動に参加することも地域活性化に重大な影響を与える。中井（2014）が分析した京都の事例では、伝統的農村景観は地元住民の認識の変化により文化的価値を付与されて観光資源へと変換され、その際に景観を保護する主体は国から自治体と地元住民へと移り、その結果として、より確実な保護活動への取り組みがみられる。

人口流失に伴って弱体化をした農山村は、それ

らを含む自治体が行政サービスの向上を目的に他の自治体と合併された例に多くみられる。農山村が強力な自治体に編入されることは、井上（2017）が分析した例のように、農山村が自らの地域的独自性を失う機会となる恐れがある。それゆえに、地域における資源の再見直しや新たな価値付けを通じて、地域の独自の性格を表象することが求められる。本研究は長野県の3地域にまたがる歴史的街道を対象にするが、街道を資源として復興した契機は市町村合併である。

歴史的街道に関する従来の研究は複数ある。その中で、街道は地域にとって単に輸送機能をもたらすだけでなく、地域の歴史と民俗など文化的な側面と関係の深い重要な存在であることが指摘されてきた。例えば西海（2017）は、伊勢参宮のために利用される伊勢街道を対象に、その沿道で伊勢信仰の伝播によって生み出された民俗文化の特性を述べた。歴史的街道の保護存続や地域創生に関する研究には、宮山・上甫木（2011）、箕浦（2014）、黒沼（2017）などがあり、それぞれ京街道の継承の在り方、市民と行政の協働による八ヶ岳南麓風

景街道の保全、街道の現地保存による野外博物館化の検討を主題に論じている。

しかし、本研究の研究対象である秋葉街道についての研究はほとんどない。磯前（2018）は、遠山郷の宿帳を用いて1892年の秋葉街道における利用者の状況を明らかにした。その結果、参詣者よりも行商人と職人が多く、往復より片道で利用する例が多かったことが示された。しかし、長野県における秋葉街道の近年の復興経緯とその後の利活用については、補遺として簡単に述べられているに過ぎない。

以上の研究は、歴史的街道には注目しているものの、ある一つの狭い地域を取りあげて、そこでの地域資源として街道が地域活性化に果たす役割を検討している。しかし、街道には輸送機能があり、それゆえに複数の地域にまたがった現象がみられることが大きな特徴の一つである。ほとんど利用されなくなった旧街道でもその特徴を有している。さらに、歴史的街道を取りあげて、沿道の複数の地域が、地域資源となりうる街道に対してどのような認識を持っているかについて追究した研究は不十分である。

本研究は長野県伊那市長谷、大鹿村、飯田市遠山郷にまたがる秋葉街道を研究対象に、秋葉街道の復興経緯に着目しながら、各地域による秋葉街道をめぐる地域資源化の取り組みを比較・検討することを目的とする。

その目的を達成するため、第Ⅱ章は3つの研究対象地域の地域的特徴を概観する。第Ⅲ章は、2017年10月22日から28日までおよび2018年5月20日から26日までの2回の現地調査に基づき、3つの地域における秋葉街道の復興活動についてそれぞれ説明する。第Ⅳ章は、3つの地域における行政の地域資源化に対する姿勢とボランティア団体の活動内容を明確にするとともに、当地域における秋葉街道の位置づけを分析する。第Ⅴ章は、それまでの分析をもとに、各地域で秋葉街道への対応が異なる原因を検討し、農山村における地域資源の価値付加と利活用の意義を考察する。

Ⅱ 研究対象地域

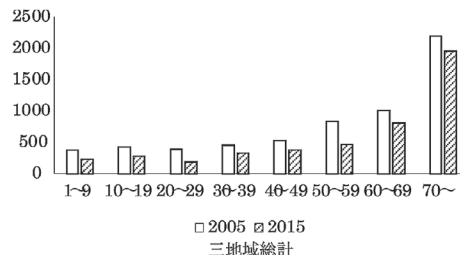
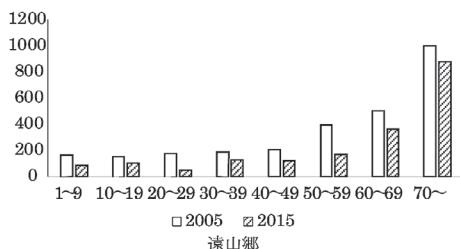
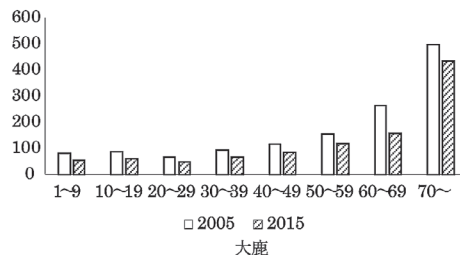
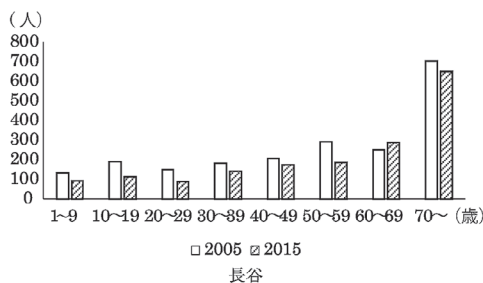
研究対象地域の伊那市長谷、大鹿村、飯田市遠山郷は、長野県の南東部、南アルプスの西麓に位置する。対象地域全体の西部には、南北に走る中央構造線があり、最西端にある伊那山地との間に峡谷地域を形成している。構造線に沿って秋葉街道が通り、ほぼ一般国道152号と重複する。その沿道には集落が点在し、狭いながらも耕地がみられる。

伊那市長谷（以下、長谷と呼称する）は、長野県上伊那郡の東部に位置する旧村であり、面積は320.81km²である。北から南に向かって、国道152号沿いに非持山、非持、溝口、黒河内、中尾、市野瀬、杉島、浦の8集落を有する。2006年（平成18）3月31日に伊那市、高遠町と合併し、新伊那市として発足した。

下伊那郡大鹿村は、長谷と遠山郷の間に位置する村であり、面積248.28km²である。天竜川の支流・小渋川が南アルプスから西流している。1889年（明治22）4月1日、町村制の施行により、旧大河原村・鹿塩村の区域からなる大鹿村が発足した。以降120年にわたり、大鹿村は合併を経験していない。

遠山郷は、天竜川の支流遠山川に沿って広がる山深い谷間の地域であり、面積は88.12km²である。行政上は、飯田市南信濃・飯田市上村（旧下伊那郡南信濃村・下伊那郡上村）である。1960年4月1日、遠山村と木沢村が合併して南信濃村が発足した。2005年10月1日、南信濃村と上村は飯田市に編入し、現在の行政区域となった。

長谷、大鹿村、遠山郷は、日本の他の農山村地域と同様に、人口減少、少子高齢化の課題を抱えている（第1図）。人口問題の解消や地域振興を目指す3地域では、地域活性化と密接に関係する観光に注目している。知名度の高い南アルプスが存在するものの、山麓部に点在する集落は登山者にとって登山前後に準備や休憩をする拠点としてしか機能していない。この状況は、観光者をある一定時間滞在させる観光目的地とは位置づけが異



第1図 対象地域における人口の変化 (2005-2015年)

(国勢調査により作成)

なり、登山者が対象地域の活性化に直接貢献することは困難である。つまり、地域資源を再発見し、それを観光資源として活用することで、地域の魅力を外部に発信し観光者を誘致することが必要である。これは農山村地域においてしばしば利用される地域活性化の手段である。対象地域においては、千年の歴史を有し、この地域の文化と関わりの深い秋葉街道は、地域資源として再発見され、観光資源として活用されている事例であると位置づけられる。

なお長野県では、1970年代以降、県内の道路建設によって歴史を有する古道の消失に懸念された。そのため、1983年、長野県教育委員会は国庫補助金を使用し、秋葉街道の遺跡、道沿い文化財の分布状況、保存実態など総合的に調査を実施し、報告書にとどめた(長野県教育委員会、1985)。

秋葉街道は、信州から静岡県浜松市(旧春野町)にある秋葉神社へ秋葉詣でをする街道である。一方、静岡からは信州街道と呼ばれてきた。秋葉街道の歴史は縄文時代まで遡ることができる(長野県教育委員会、1985)。古くは海のない信州に塩

を運ぶために利用された。太平洋からの塩を信州に輸送するルートは「信遠古道」と命名された。南北朝時代、信遠古道は塩の道から軍用路へと機能変換された。江戸時代になると鎮火の秋葉信仰が広がり、信遠古道の機能は信州から静岡県秋葉神社へ参詣する信仰の道に変更された。街道名も参詣道の知名度の高さにより、秋葉街道とされるようになった。このように、秋葉街道は、塩の道、軍用路、信仰の道のように、時代とともに異なった機能をもつ歴史の道である(中根ら、2012)。

1953年以後、1965年、1970年、1993年の4回に渡って、道路法に基づき長野県上田市から、上田市丸子町、長和町、茅野市、伊那市高遠町、飯田市上村、飯田市南信濃村、静岡県浜松市天竜区、浜北区を経て静岡県の浜松市街に至る路線は、一般国道152号に指定施行された(変更・延伸を含む)。152号国道は、ほぼ秋葉街道と重複している。しかし、研究対象の秋葉街道は、152号国道とは重ならない、尾根や谷に沿った、ボランティア団体により整備された旧道である。本研究で扱うウォーキングイベント「秋葉街道踏破」は、整

備された道が無い地区では、国道を利用せざるを得ない場合があるが、国道ではなく整備された旧道を歩くことを主としている（第2図）。

Ⅲ 秋葉街道の復興活動

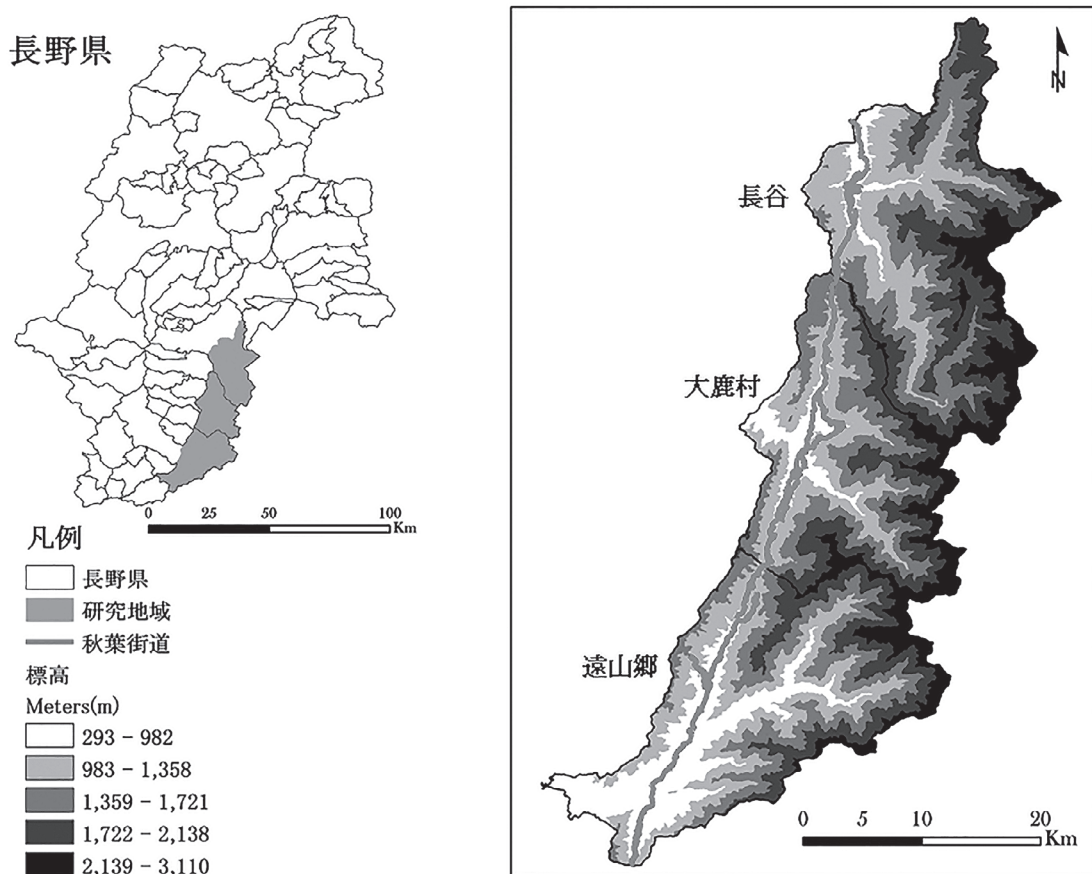
Ⅲ－１ 秋葉街道の復興契機と発足

既述のように旧長谷村は、2006年3月31日に新伊那市の一部になった。この合併を契機に、長谷の住民は自地域の地域性を改めて考えるようになったという。地域の魅力を外部に発信することを考える中で、地域住民はかつてから長谷にゆかりの深い秋葉街道へ目を向けた。行政の後押しもあり、2007年6月にボランティア団体「秋葉街道道普請隊」が発足し、長谷における秋葉街道の復興

興が開始された。

当時「秋葉街道道普請隊」の隊長を務めた高坂氏は、長谷の領域における秋葉街道の整備・活用に努めていた。しかしそれだけではなく、静岡にある秋葉神社への参詣道として秋葉街道の全線復興を目的に、沿道にある大鹿村、遠山郷において秋葉街道復興に関する情報紹介活動を展開した。

大鹿村の住民は、高坂氏の紹介活動からヒントを得て、地域資源を見直すようになった。そのなかで、大鹿村内でも秋葉街道が観光資源として認識され、地域活性化への活動が企画された。2007年12月、初期メンバー5人によるボランティア団体「秋葉古道歩き隊」が結成され、長谷の秋葉街道道普請隊と合流して地域連携活動が開始された。当初、秋葉古道歩き隊は長谷の普請隊の支援



第2図 研究対象地域：伊那市長谷、大鹿村、遠山郷にまたがる秋葉街道

を得て道整備を進めた（写真1）。

しかし、大鹿村行政は秋葉街道の復興と地域活性化とのつながりを政策の中で重要視しなかった。また、国有林と私有林という森林の所有区分問題も歩き隊の整備活動の障害となった。国有林野では街道整備が困難であるために、該当部分では整備路線を迂回せざるをえなかった。また私有林については、その持ち主から理解を得て、整備作業を進めていた。こうした復興活動は、地域活性化の事例として多くの新聞に掲載されるようになると、それが大鹿村行政の政策を変更させる契機となった。その結果、徐々に歩き隊への支援を行うようになり（写真2）、大鹿村における秋葉街道に関するイベントも活発化している。

遠山郷でも同様に高坂氏の影響を受け、秋葉街道の復興に着手した。遠山郷は、知名度の高い観光目的地としての地位にあり、多くの見どころを有する。それらのスポットを運営するために、すでにいくつかのボランティア団体が存在していた。飯田市行政により主導された秋葉街道復興活動において、既存のボランティア団体の力を借り、街道整備が進められた。後述する「神様王国」が、神々をめぐるウォーキングコースの整備と案内を実施する団体である。そのコースの中に、歴史の道・秋葉街道コースが含まれている。ここでは、秋葉街道は遠山郷の観光資源の一つとして、他の観光資源と組み合わせる形で存在しているのである。

Ⅲ-2 秋葉街道の維持とイベントの展開

秋葉街道の沿線自治体では毎年、道の整備事業と称する、倒木の除去や落ち葉かきの作業を行っている。伊那市長谷においては上述の秋葉街道道普請隊が年に2・3回の頻度で整備作業を行っている（2017年度は5/13、7/30、10/30に実施）。整備に用いる道具などの費用は、普請隊隊員による年会費（1000円/人）や助成金を主に充てている。また、市内の街道には、県からの支援金によって造られた看板が多数設置されている。秋葉街道道普請隊は20人の会員を数えるが、毎年恒例の整



写真1 大鹿村秋葉古道歩き隊による看板
(2017.9 周撮影)



写真2 大鹿村行政の支援をもとに秋葉古道歩き隊により作られた看板
(2018.5 周撮影)

備事業に参加する会員は10人を下回ることが多い（写真3、4）。

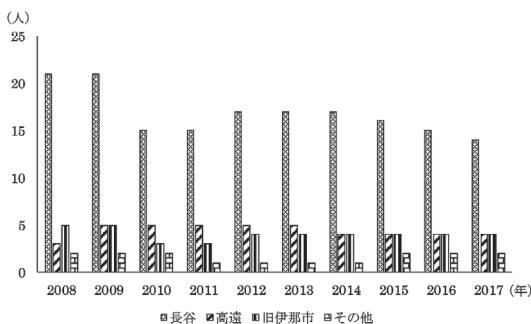
本研究の対象地域における、秋葉街道に関連する団体の活動年表をまとめたものが第1表であるが、長谷では2006年にはすでに街道の整備作業に着手しており、比較的早くから秋葉街道を観光資源として見ていたことがわかる。2008年には秋葉神社までの全行程を歩き通すイベントを開催し、積極的な活動がみられた。

しかし、長谷では高齢化が深刻化しており、隊員の70%が長谷の住民である秋葉街道道普請隊において、高齢化による隊員減少が大きな課題である（第3図）。長谷では移住者受入計画「溝口未



写真3, 4 長谷の秋葉街道における道整備前と整備後のルート

(2018年5月 周撮影)



第3図 秋葉街道道普請隊の隊員数推移

(秋葉街道道普請隊事務局提供資料により作成)

来プロジェクト」が、行政と住民の支援のもとで活発している。2014年には、移住者向けの体験ツアーが秋葉街道の活用と連携し、ガイド付きで秋葉街道ウォーキングを含めることが計画された。しかしながら、人里離れた秋葉街道を内容に実施するツアーは移住体験ツアーには向いていないという理由で中止された。その後も秋葉街道に関するイベントなどはほとんど行なわれていない。

大鹿村においても、秋葉古道歩き隊が同様に古道の整備作業を行なっているが、こちらは冬季を除いた4～10月の間に6回の頻度で作業を行なっている。毎回4～8人の会員が各々ツルハシや鋤

を手に倒木除去や草刈りを実施する。また、秋葉古道歩き隊では毎年11月3日（文化の日）に、ウォーキングイベントを実施している。決められたルートは無く、毎年ルートを変更して開催している。インターネットや新聞を介して宣伝を行ない、多いときには80人参加することをあつたが、近年は30～40人ほどにとどまっている。秋葉古道歩き隊は25人の会員を抱えているが、秋のウォーキングイベントにはガイド役を含め、10人ほどが参加している。秋葉古道歩き隊が主催するイベントの他にも、外部の旅行会社が企画するツアー旅行に会員がガイドとして参加することもある（写真5）。大鹿村では、秋葉街道に関する活動はほとんど秋葉古道歩き隊により主導されており、行政はそれら活動の後押しをしているとみられる（第4図）。

飯田市遠山郷では長谷・大鹿のような秋葉街道を主軸にした団体は存在しない。遠山郷においては、各集落に史跡保護や観光振興を図るグループが存在し、そのうち文化財保護を行なう団体の有志が年2回、秋葉街道の道整備を行なっている。また、遠山郷では集落各地に石碑や石仏が点在しており、それらを広く知ってもらおうと2008年に

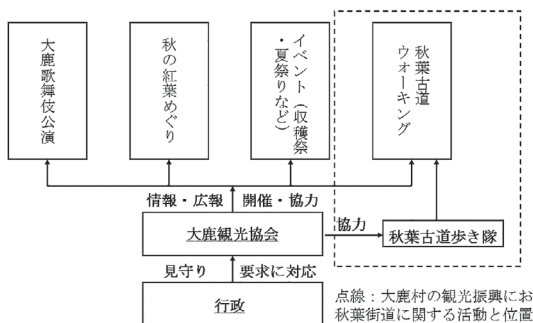
第1表 伊那市長谷における活動年表

時期	活動
2005/7/21-2006/2/6	景観計画策定委員会（8回）
2006/2/1	秋葉街道発掘調査隊発足
2006/3/11	中尾・市野瀬調査
2006/3/31	長谷、伊那市と合併
2006/9/20-2007/3/26	秋葉街道観光計画策定委員会（7回）
2006/10/1-2016/7/28	街道整備作業（39回）
2007/3/31-4/1	秋葉神社参拝
2007/6/16	秋葉街道道普請隊発足
2007/11/13	秋葉街道道普請隊役員会
2007/12/14	秋葉街道歩き隊と共同作業
2008/6/28	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2008/11/22	伊那市内全線開通
2008/12/13-12/15	秋葉街道全線踏破
2009/4/14	保育園の親子遠足の下見のガイド
2009/4/29	もみじの会の植樹祭
2009/5/12	バスハイクツアーのガイド
2009/5/23-5/24	秋葉街道交流集会
2009/10/25	小川路峠へ登ってみよう
2009/11/3-11/4	秋葉街道交流会
2009/10/3	古道・秋葉街道ウォーキング
2009/12/12-12/13	秋葉街道踏破イベント（全線）
2010/2/21	秋葉街道街道踏査
2010/6/5	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2010/9/29	秋の秋葉街道を歩く
2010/12/16-12/17	秋葉神社参拝
2011/2/24	県元気づくり支援金ヒアリング
2011/6/18	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2011/10/5	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2012/5/10	千葉市小学校視察対応
2012/6/23	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2012/8/22	秋葉古道探索
2012/8/24	秋葉古道探索
2013/3/2	秋葉街道勉強会
2013/3/19	豊田市視察団対応
2013/8/25	秋葉古道探索
2013/10/26	「古道・秋葉街道ウォーキング」
2013/12/3	ジオパーク標識検討現地対応
2014/9/20	信州伊那アルプス街道推進協議会主催 秋葉街道ウォーキングイベント ガイド対応
2014/11/13	信州伊那アルプス街道交流会議
2015/11/26	国道361号権兵衛峠道路開通10周年記念シンポジウム
2016/1/22	美しい町づくり講演会
2016/9/28	心のふるさと木曾路交流会
2016/10/29	入野谷山トレッキング

（秋葉街道道普請隊事務局提供資料により作成）

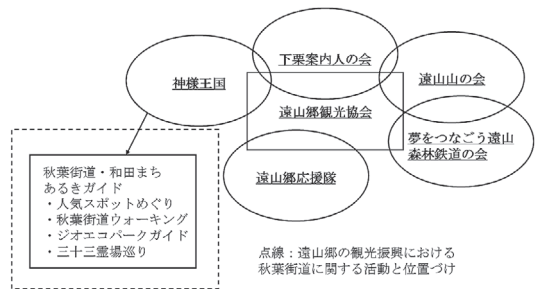


写真5 イベント用の法被
(2018. 5 周撮影)



第4図 大鹿村における観光振興組織の構成
(大鹿村役場への聞き取りにより作成)

「遠山郷神様王国」¹⁾という名称の団体が誕生した。当団体ではガイドブックを配布したり、ガイドツアーを設定したりして集客を図っている。秋葉街道のコースは、「神様王国」が設定するウォーキングコースの1つに位置づけられており、当地では下栗の里や神様王国を観光PRの主軸に据えていることが読み取れる。秋葉街道よりも他の観光資源を優先してPRしている理由について遠山郷観光協会の菅沼氏は、秋葉街道のみでは集客が難しいこと、下栗の里など他の観光資源があるため敢えて秋葉街道を主力に据える必要がないことを挙げている（第5図）。



第5図 遠山郷における観光振興団体の構成
(遠山郷観光協会への聞き取りにより作成)

秋葉街道を中心にした地域連携の観点において、「秋葉街道信遠ネットワーク」の存在は不可欠である。また、上記3地域に静岡県浜松市水窪を加えた4地域は「秋葉街道信遠ネットワーク」を結成し、秋葉街道の観光資源化を図っていた。当団体は2009年に発足し、総会の開催の他、各地域での交流や道普請、ウォーキングイベント等を通じて秋葉街道のブランド化や観光振興を目的としている。当初は街道整備やウォーキングイベントをはじめ、「大学」と称した勉強会や、映画の製作、ウォーキングマップや焼酎の製作など様々な活動が活発に行われたが（第2表）、ここ数年は会議等のイベントが行われておらず、活動停止の状態にある²⁾。また、街道を通じて、3地域を連携する動きもみられない。

IV 各地域における秋葉街道の位置づけ

秋葉街道はかつて塩の道として栄え、のちに観光資源として注目されると沿道各地で様々な対策が講じられた。しかし、現在その活動は停滞しているところもあれば、今でも秋葉街道に関連したイベントが行われているところもあり、地域によって秋葉街道の地域資源としての位置づけは異なる。本章では前章での記述も基にしながら沿線各地域が秋葉街道に対してどのようなまなざしを向けているのかについて論じていく。

伊那市長谷では、他地区に先駆けて2007年に「秋葉街道道普請隊」が発足し、過去には大鹿村の「秋

第2表 秋葉街道に関連する団体の活動年表

時期	活動
2009/2	秋葉街道信遠ネットワーク発足
2010/7/31-8/1	秋葉街道夏季大学（テーマ「信仰の道」）
2010/10/23	秋葉街道朝大学（「テーマ「秋葉信仰とは・・・」）
2010/11/14	第1回秋葉道・秋葉古道ウォーク（浜松田～秋葉山）
2010/11/19	映画「アンバマイカ」完成試写会
2010/11/20	秋葉街道朝大学（「テーマ「秋葉信仰と明治の神仏分離令」）
2010/11/20	第2回秋葉道・秋葉古道ウォーク（浜松田～秋葉山）
2010/11/21	第3回秋葉道・秋葉古道ウォーク（浜松田～秋葉山）
2011/1/14	「アンバマイカ」上映会（於：気の里・ヘルスセンター）
2011/1/15	「アンバマイカ」上映会（於：大鹿村交流センター）
2011/1/29	秋葉街道朝大学（「テーマ「秋葉信仰と祭文化」）
2011/2/5	「アンバマイカ」上映会（於：水窪山村開発センター）
2011/2	焼酎「秋葉街道」蔵出し
2011/2/26	「アンバマイカ」上映会（於：遠山郷・和田城）
2011/3	秋葉街道全体マップ発行
2011/5/1、5/8	秋葉古道ウォーク
2011/5/19-5/24	秋葉街道写真コンテスト
2011/5/25	水窪チャレンジデ：国盗り～青崩峠コース
2011/6/5	秋葉山表参道清掃登山

(聞き取り調査および秋葉街道信遠ネットワークHPを基に作成)

葉古道歩き隊」と交流会を開催したり、長谷から秋葉神社まで歩き通すウォーキングイベントなどを開催していた。しかし、現在は年3回の道普請以外のイベントや事業は行われておらず、他地域との交流もほとんどない。街道という特性上、観光客が来訪したとしても、そこに長時間滞在せずに通過してしまうため、食事や宿泊、土産物の購入といった経済的利益につながりにくいことが、秋葉街道の観光資源としての魅力低下の一因と考えられる。現在長谷では南アルプス登山を中心に観光振興を進めている。

それに対して大鹿村では、2007年設立の「秋葉古道歩き隊」を主体に、道普請事業に加えてウォーキングイベントなど、現在も秋葉街道に関する事業・イベントが行われている。行政は積極的に事業の計画やイベントの開催を執り行うことは少ないが、「秋葉古道歩き隊」が開催するイベントを広報するなど、民間団体の活動をサポートする役割を果たしている。この「秋葉古道歩き隊」は村

民有志によって結成された団体であるが、村外・県外から移住した村民が中心になって生まれた団体である。かつて隊長を務めた秋山氏は、秋葉街道という歴史あるものが廃れ放置されている現状を憂い、街道の保全と団体の設立に奔走した。

また、秋葉古道歩き隊という名称においても当地の秋葉街道の位置づけを読み取ることができる。団体名の由来について、設立当初から事業に携わる大橋氏は、村内には秋葉街道以外にも古い山道が多くあり、それらも一体として保全し、観光化を図るために「街道」ではなく「古道」という名称を用いたと説明している。事実、関連活動として「伊那坂東三十三番札所巡り」の各古寺の調査や冊子の発行、古寺巡りの案内も行なっている。現在は団体を退いた秋山氏も秋葉街道と並ぶ塩の道でもある「中馬街道」の調査・保全に尽力している。しかし、毎年恒例のウォーキングイベントが行なわれる11月は紅葉シーズンでもあり、重要無形民俗文化財に指定されている大鹿歌舞伎

の秋の公演が行なわれ、観光客が集中する時期ではあるが、単発のイベントが複数開催されるだけで連携が取れていない現状である。大橋氏はイベント間の連携を深め、より集客効果を図りたいと語っており、秋葉街道を中心に観光化を進めようとする意気込みがうかがえる。

長野県内にあるもう一つの秋葉街道沿線地域である旧南信濃村遠山郷（現飯田市）では、先述の2地域とは秋葉街道の位置づけが異なる。すなわち、長谷の「秋葉街道道普請隊」や、大鹿村の「秋葉古道歩き隊」のような秋葉街道を中心に観光化を図る団体が存在しないことである。南信濃村は小さな町村が集まってできた自治体である。平成の大合併を機に南信の中心都市である飯田市の一部となったものの、伝統的に隔絶性が高く、それゆえ各々が遺跡・文化財保護を行う意識が強く、集落ごとに遺跡保護・観光振興団体が存在するのではと考えられる。また、前述のとおり遠山郷は下栗の里をはじめ、秋葉街道以外の観光資源を中心に観光振興を図っており、街道以外の観光資源と連携して秋葉街道の観光資源性強化を図ろうとする大鹿村とは対照的である。

以上のように、同じ秋葉街道を地域資源として認識し、観光に活用していても沿線地域によってその姿勢・位置づけは異なり、それがイベントや事業の開催状況に表れている。

V おわりに

本研究では、長谷、大鹿村、遠山郷におけるボランティア団体への聞き取り調査を通して、各地域による秋葉街道をめぐる地域資源化の取り組みを比較・検討してきた。その結果は次のようにまとめられる。

秋葉街道の地域資源化の取り組みは、市町村合併を契機として、2006年前後にまず伊那市長谷で

なされた。この影響を受けて、大鹿村と遠山郷でも復興計画を立ちあげて街道整備活動が開始された。しかし、その後の3地域の対応は異なっている。

先導的な役割を果たした長谷では、観光者数の少なさと村の少子高齢化によって、振興策の中心は秋葉街道から移住プロジェクトに移った。秋葉街道に関するボランティア団体「秋葉街道道普請隊」も隊員の高齢化が深刻で、活動は徐々に減少してきた。行政との連携を有する大鹿村では、ボランティア団体「秋葉古道歩き隊」が主体となって、道整備とウォーキングイベントを実施している。秋葉街道は重要な観光資源と認識され、観光発展に寄与することが期待されている。多くのボランティア団体を有する遠山郷は、それらの団体の支援で秋葉街道の整備を行った。しかし、他に知名度の高い観光スポットやイベントがあるため、秋葉街道の観光資源としての地位は低い。

3地域の動向を分析した結果、観光資源としての秋葉街道の整備と活用の展開が異なる。街道に関する団体を設立した地域では、活動への積極的な関与がみられる。とくに、大鹿村では、観光資源としての秋葉街道への関心度が高く、人口減少や少子高齢化を打開する地域資源として位置づけられているように思われる。一方、地域資源が多い遠山郷では、秋葉街道の重要性は小さい。

歴史的街道は線的で複数の地域をネットワークとして連結する。それゆえに、各地域が相互連携して広域的な観光目的地を作り出す可能性がある。しかし、各地域において街道を地域資源としてどのように認識するのか、さらにはそれを観光資源としてどのように計画するのかは異なる。それゆえに、地域間の温度差が生まれるのである。その温度差がどのように生まれたのか、資源に対してどのような影響があるのかに関して、本研究がひとつの例を示したと考えられる。

現地調査に際し、秋葉街道道普請隊の高坂英雄様、中山勝司様、池上直彦様、伊那市長谷総合支所の有賀俊康様、秋葉古道歩き隊の大橋俊一様、秋山光夫様（現：大鹿村議会議員）、大鹿村役場の菅沼孝哲様、遠山郷観光協会の菅原慎一様、かぐら山荘・カフェ花野の岩瀬憲司様、夢をつなごう遠山森林鉄道の会の前澤憲道様をはじめとする長谷、大鹿村、遠山郷の皆様から多大なるご協力を賜りました。また本稿の執筆にあたって筑波大学生命環境系地誌学分野の先生方からご指導いただきました。末筆ながら記して感謝いたします。なお、本稿の骨子は2018年10月に行われた第13回中日韓地理学会議（於：重慶市、西南大学）にて発表した。

[注]

- 1) 神様王国HP: <http://tohyamago.com/kami/>（最終閲覧日：2018年8月14日）。
- 2) 秋葉街道信遠ネットワークHP: <http://akihakaidou.eco-iida.jp/>（最終閲覧日：2018年8月14日）。

[文 献]

- 磯前陸子（2018）：1892年遠山郷秋葉街道を行く人々－「明治期貳拾五年 宿泊人名簿」を読む－。お茶の水地理, **57**, 20-29.
- 井上晶子（2017）：市町村合併がもたらした地域社会の変化－主産業としての観光振興の視点から－。追手門学院大学地域創造学部紀要, **2**, 1-32.
- 呉羽正昭（2013）：レクリエーション・観光・ルール・ツーリズムの展開－。田林明編『商品化する日本の農村空間』農林統計出版, 29-44.
- 黒沼善博（2017）：地域創生に向けた野外博物館の複合（2）－大仏鉄道・京街道・佐保路を事例とした提唱－。地域総合研究, **45**(1), 31-43.
- 中井治郎（2014）：〈ふるさと〉の文化遺産と観光資源化：京都府南丹市美山町「かやぶきの里」をめぐる。龍谷大学社会学部紀要, **44**, 114-126.
- 長野県教育委員会（1985）：『歴史の道調査報告書11-15権兵衛街道・木曾街道（飛騨街道）、秋葉街道、裾花川通り大町道、土尻川通り大町道』長野県文化財保護協会。
- 中根洋治・奥田昌男・可児幸彦・早川清・松井保（2012）：秋葉街道の成立過程と果たしてきた役割の研究。土木学会論文集D2（土木史）, **68**(1), 22-37.
- 西海賢二（2017）：伊勢信仰と街道－古橋家文書からみる－。地域政策学ジャーナル, **5**(2), 13-25.
- 箕浦一哉（2014）：道路景観保全活動における市民との協働が地方自治体職員の認識と行動に与える効果－「八ヶ岳南麓風景街道の会」を事例に－。土木学会論文集G（環境）, **70**（6）, 267-278.
- 宮山泰明・上甫木昭春（2011）街道の存続状況と整備・利用状況からみた京街道の継承の在り方に関する研究。ランドスケープ研究, **74**(5), 773-778.

The Reconstruction and Redevelopment of Akiha Route in the Nagano Prefecture, Japan

Yufang ZHOU, Fei LIU, Mikihiro HAGA
Yunqi ZHANG, Masaaki KUREHA

Keywords: Akiha Route, regional resources, volunteer, Hase, oshika, toyamago.

Rapid urbanization has brought out large population migration from the rural area to urban or metropolitan area. In Japan, there are growing concerns about the increasingly serious phenomenon of population aging and low birthrate in the rural area. To revitalize the rural areas, to increase the immigrant population, and to flourish the local economy, the exploitation and development of local resources and the recognition of distinct tourism value are desperately needed.

We take three typical Japanese traditional villages of the Nagano Prefecture (Hase region of Ina city, Toyamago region of Iida city and Oshika village) as the study case, we attempt to understand the reconstruction condition of the Akiha Route in the three areas by the interview surveys as the valuable clues for development planning and design of rural tourism resources.

Therefore, the purpose of this study is to investigate the measures and actions of the reconstruction and redevelopment in the Akiha route of three regions at Nagano Prefecture, Japan (i.e., Hase region of Ina city, Toyamago region of Iida city and Oshika village). Subsequently, we compare and interpret their difference.

In this study, totally, ten persons were investigated, including volunteers, relative staffs from the government, tourism, regional management. To derive more useful information about the condition of Akiha Route, we observed the route several times, as well as participated in the recondition activity once. The results of interviews revealed that the government took the opportunity of regional administrative division adjustments, the reconstruction and redevelopment activities of Aikiha Route were initiated from Hase region, then Oshika village and Toyamago region were followed.

However, there are significant differences among the three study areas. Although Hase region firstly began the reconstruction activities of Akiha Route for attracting tourists and making the regional development prosper, the result has been far from satisfactory. Hence, their focus gradually shifted to the program of immigration. In contrast, the Akiha Route played a crucial role in tourism resources of Oshika with the support of government and relevant organizations. The redevelopment activities of Akiha Route in the Hase region and Oshika village were driven by the voluntary association. However, in the Toyamago region, the implementation of Akiha Route redevelopment has been dominated by regional government. The Akiha Route activities were generally integrated into other regional tourism resources and few separately implemented.

The findings of this study would promote the diversity of regional tourism resources and show a significant effect on the development and management in the rural-mountain area.